

発表タイトル	「記念植樹」と近代日本 － 1879年グラント将軍訪日記念植樹式一考 －
発表者所属名	国際日本研究専攻
発表者氏名	岡本 貴久子
<p>本報告では近代日本において営まれた記念樹を植えるという行為、即ち「記念植樹」に関する文化史の一つとして、1879年に国賓として来日した米国第18代大統領 U.S.グラント、通称グラント将軍による三ヶ所（長崎公園・芝公園・上野公園）の記念植樹式を事例に、それらが行われた公園という「場」の歴史の変遷を分析することによって、何故そうした儀式的行為が営まれたかという意図とその根底に備わっていると見られる自然観について検討する。</p> <p>何故に記念植樹かといえば、近代化政策の一環として権力の可視化を目的に記念碑や記念像が次々と建立されるなか、記念植樹という樹木を特別に植樹するという行為もまた時の政府や当時を代表する林学者らによって国家事業の一環として推進されていたという事実があり、且つこうした儀式的行為を広く一般に浸透させる為に逐一ニュースとして新聞記事にしていた報道機関の存在から、記念に植樹するという行為もまたネーションステーツ形成にかかる日本の近代化の一牽引役として作用していたのではないかと推測され得るからである。</p> <p>今回は 1872 年のグラント政権が開国後間もない新政府の近代化政策に与えた諸影響を中心に論ずるが、例えばこのグラント政権下において米国で初めて国立公園が設定され、Arbor Day と称する植樹の祝日が定められ、且つ同政権下の農政家ホーレス・ケプロンが開拓使顧問として来日、増上寺に開拓使学校設置を提案するなど、グラント政権下における殊に「自然」に関わる政策で新政府が手本としたと見られる事柄は少なくない。こうした近代化の指導者の一人ともいうべきグラント将軍によって、新たな「公園」という空間において米国を代表する巨木「ジャイアント・セコイア」等の記念植樹式が営まれたわけだが、新政府にとってそれは単に将軍の訪日記念という意味のみならず、「旧習を打破し知識を世界に求める」という方針に基づき西欧化政策を着実に根付かせる意図を持ってなされた儀式的行為であったと考えられる。しかしながら同時にこの儀式的行為は「樹木崇拜」という新政府が棄てたはずの神仏習合的、アニミズム的信仰が根底に備わるものであり、新旧入り混じった自然に対する思想が見え隠れする点を見逃してはならない。</p> <p>明治初期の記念植樹という行為は、いわば和魂洋才という姿勢によって新旧或いは西洋と東洋の思想とかたちと融和させる為に行われた一種の儀式的行為であったと同時に、明治の指導者たちはこうした自然観を応用しながら近代化促進につとめたといえるのではないだろうか。</p> <p>なお報告者が今回訪問したイスラエルに関する補足として、グラント将軍の世界周遊に関する記録には日本上陸前の 1878 年 2 月、エルサレムの聖地を訪れた将軍がゲッセマネの受難のオリブの木 "The Tree of Agony" を愛でる記述があるなど各地の樹木に心を寄せる将軍の姿が描かれていることや、今日のイスラエルにおいては建国にかかるシオニズム思想を礎とする "Tu Bishvat"（樹木の新年）と呼ばれる国民の植樹祭があることなどについても若干言及したい。</p>	